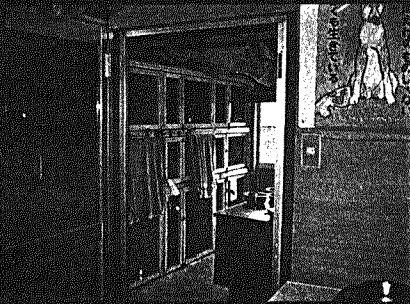
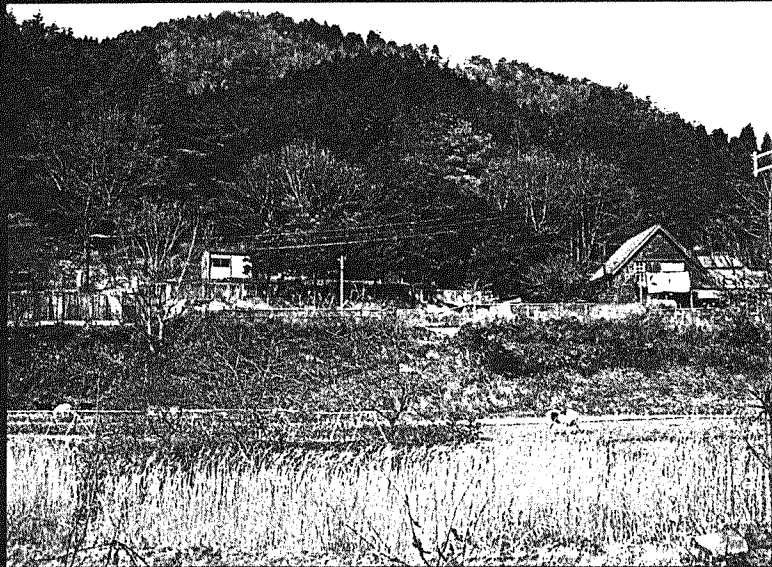




↑風邪などで体調のよくない動物は屋内に収容されている。(2/8)



↑犬の食事は市販のドッグフードだけでなく、スタッフの愛情こもった手づくり料理もある。(2/8)



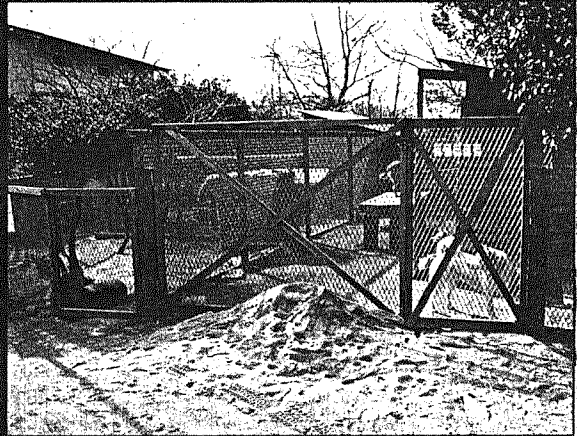
↑右端のログハウスが「アーク」の事務局。約1000坪の敷地内には手づくりの犬舎や猫舎が建っていた。手前の田んぼではポニーとヤギが草を食べていた。(2/8)

ARK-アーク (☎0727・37・0712)

●住所 大阪府豊能郡野瀬町野間大原595 ●活動内容 被災動物の保護・里親探し、ペットの一時預かりなど
●賛助金送付先 富士銀行天満橋支店 普通1611189 (口座名義「アーク」) ※ペットフードのカンパやボランティアも求めています。

↑被災動物の里親になることは、重要な救済活動のひとつ。「私にはなにもできない……」とあきらめずに、もう一度できることを考えよう。(2/8)

↑のびのび暮らせるように、数匹ずつに仕切られた犬舎。建築中のビニールハウスの犬舎はちょっと狭そうだが、ここに収容されている動物は幸せだ。(2/8)



被災動物のために 収容施設を建設

める署名運動を中心に活動する。また、それが不可能な場合に備えて、独自にペット飼育可能な仮設住宅の建設の用意もあるという。

「僕たちがこれまで保護した動物の九割以上はすでに里親さんのもとで暮らしています。今では大きな収容施設もできているので、行政が何もしていなかった災害初期の動物救済という僕たちの当初の目的は達成されたと思います。これからは、ペットを抱えた被災者が動物を手放さなくて済むよう、方法を考えていこうと思います」

五年前に大阪府豊能郡野瀬町の山間に建設された動物保護団体「ARK-アーク」(アニマル・レフュージ・関西)は、非常時の動物収容施設として知られている。ペットの一時預かりは有料だが(猫一匹一日千五百円、月一万五千円)、その他にも捨てられた動物の保護・里親探しはもとより、ワクチン接種や不妊・去勢手術を行っている。財源の多くは一般の寄付や会費で賄われている。

「アーク」の代表は、動物愛護の先進国であるイギリスから二十年前日本にやって来たエリザベス・オリバーさん。残念ながらオリバーさんには直接お会いできなかったのだが、スタッフの向井由紀さんにお話をきくことができた。

「地震前の収容数は、犬百十頭、猫三千五頭でしたが、震災後、犬二十頭、猫五頭を新たに無料で保護しています。実際には行政だけでは対応しきれないほどの被災動物がいるという事です。『アーク』は行政からは援助を受けていないのですが、ビニールハウスの犬舎をつくり、今後さらに増えようと思われる被災動物の保護活動を無料で行進する予定です」

そのために賛助金のカンパをお願いしたいのです」

敷地面積約千坪という「アーク」には、ゆつたりとしたレイアウトで犬が収容されていた。猫もコタツや布団などが置いてある三方所の猫舎に収容されている。しかし、収容できる頭数には限度があるので、今後は数の様子を見ながら動物を収容していくそうだ。

「今は被災動物に対する関心が高く、義援金を送ってくれたりボランティアとして来てくれたりしたいへんありがたいと思っています。しかし、この気運がいつまで続くか心配です」被災動物の問題が長期化することは必至である。里親が見つからない動物たちは、この先何年も収容施設で過ごすなければならない。その維持費やボランティアの確保はまったく保証されていないのだ。

「これを機会に、もっと動物のことを考えてほしいと思います。動物の飼育法や行政の対応、住宅問題についての意識を変えてほしいんです」取材当日、大阪の岩朝さん一家が「アーク」に保護されていたヨークシャーテリアの里親になった。もとも新聞の情報欄で小型犬を探していたのだが、長男の栄二くんが発案で、飼うんだったら被災動物を引き取ろうということになったのだ。ここに小さな命がひとつ救われた。

被災地区を走り回る 一台のトラック

「僕たちは、基本的に今回の救済活動は地元自治体や獣医師会、愛護団体が中心になってやるべきです。他の団体はサポートにまわるべきだと思っています。東京の団体が神戸に収容施設をつくるより、里親探しや援助物資で手伝いをするほうがより被災動物のためになるんです」そう語るのは東京の動物愛護団体